整理番号 17-07

（様式 3-1）

平成 29 年度　プロジェクト研究費研究実績報告書

平成 30 年 5 月 8 日

代表者　伊藤　恵子

研 究 課 題 名	コミュニケーション支援のための自閉スペクトラム症(ASD)児の語用論的能力の検討
研 究 期 間	平 成 ２ ８ 年 ５ 月 ３ １ 日 ～ 平 成 ３ ０ 年 ３ 月 ３ １ 日
共 同 研 究 者	安田哲也（共同研究者）、小林春美（連携研究者）、高田栄子（連携研究者）

１．今年度の研究概要

昨年度のプロジェクト研究に引き続き、自閉スペクトラム症(ASD)児の語用論的情報の理解と発話意図推測の関係を調べるために心理学実験を行った。本年度では、昨年度得られたデータの分析や精緻な解析に加え、プロソディ情報と表情情報のコンビネーションが、どの程度、発話意図を推測する際の手がかりになっているか調べるために、要因計画法を用いた実験を行い、語用論的能力について検討を行った。

平成２９年度では、プロジェクト研究の最終年度に当たることから、発話意図に関する追加実験、発話の間に関する追加解析を、それぞれ行い、論文化に向けた研究推進を行った。

[1] プロソディ情報と表情情報の統合に関する研究

昨年度まで使用していた刺激の要因を統制・操作し、表情情報、発話情報、韻律情報の組み合わせが発話意図を推測する際の手がかりになっているかを調べた。

[2] 昨年度得られた発話の間に関するデータの解析

昨年度の分析に加え、注視に関する観察を行い、論文化のための示唆を得た。また、追加解析から得られた知見に関し学会発表を行い、論文化のための示唆を行うことを目的とした。

２．研究の成果

[1] プロソディ情報と表情情報の統合に関する研究

昨年度までの研究知見から、ASD 児/者と TD 児/者の応答がほぼ同程度であったことが示唆されている。平成２９年度では発話者のポライトネス的側面(特に、顔)に着目し、表情情報、発話情報、韻律情報の組み合わせを調べた。その結果、ASD 児/者、TD 児/者と共に、否定的な場面では、発話意図を推測する際に、ポジティブな表情情報の寄与が大きくなる可能性を示唆した（伊藤ら、平成３０年度学会発表予定)。

[2] 昨年度得られた発話の間に関するデータの解析

昨年度の研究知見から、ASD 児/者と TD 児/者の情動に関する推定がほぼ同程度であったことが確認されている。平成２９年度では分析を掘り下げ、データ解析を行った。その結果、ナイーブな表情において、ASD 児/者のみに発話の間情報をあまり考慮しないことが示唆された。ASD 児/者と TD 児/者の AOI に関して観察した結果、群間に関してあまり変化はなかったことから、詳細に視線タイミングを調べる必要があることが示唆された。

昨年度の知見に関し論文化を行った。

３．研究成果の公表実績・予定（年月日、方法）

研究成果の公表実績

Ａ）　雑誌論文

１）　伊藤恵子・安田哲也・小林春美・高田栄子（2018）提示条件の相違による自閉スペクトラム症児の発話意図推測．社会環境論究, 10, 39–50.

Ｂ）　学会発表等

１）　安田哲也（2018）発話の間が意図理解に及ぼす影響．新学術領域「共創言語進化」第１回領域全体会議.

２）　安田哲也・伊藤恵子・高田栄子・小林春美（2018）自閉スペクトラム症児における発話の間（ま）の解釈．日本発達心理学会第29回大会.

３）　伊藤恵子・安田哲也・高田栄子・小林春美（2017）提示条件の相違によるASD児の発話意図推測．日本特殊教育学会第55回大会.

研究成果の公表予定

Ｂ）　学会発表等

４）　伊藤恵子・安田哲也・池田まさみ・小林春美・高田栄子（2018）話者の発話意図推測に関する語用論的情報の理解　— 自閉スペクトラム症児者と定型発達児者との比較 —.　日本特殊教育学会第56回大会.